

わたしたちの協会は、日中平和友好条約の精神を守り、子々孫々世々代々にわたって両国の友好を発展させるために努力し、新潟県及び日本と世界の平和と繁栄に貢献します。



特定非営利活動法人
新潟県日中友好協会
〒951-8068新潟市中央区上大川前通7番町1243
新潟商工会議所中央会館2階
TEL.025(224)6050 FAX.025(224)6051
会長 長谷川 義明
【地域組織】
吉川日中友好協会 新潟田市日中友好協会
栃尾日中友好協会 中之口日中友好協会
いわふね国際交流協会

小さなことでも続けることで

日中の架け橋に

新潟県日中友好協会が亀田郷土地改良区の佐野藤三郎理事長のもとに設立されて来年2009年には30年になろうとしております。以来、会長で三代目、理事長で三代目になりました。

その間1979年12月に新潟市が哈爾濱市と、1983年8月に新潟県が黒龍江省と友好協定を締結いたしました。新潟県は本年、25周年の節目の年となろうとしております。県当局も記念事業を計画しておりますが、私どもも協力して行かなければと思います。

さて2007年度の活動ですが、黒龍江省とのプロジェクトである「新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力事業」は三年目（最終年）を迎え、年度末には『生態林造成ガイドライン』と業務工程報告書を作成し、JICAと黒龍江省林業庁並びに黒龍江省森林と環境科学研究院に提出いたしました。この間、新潟大学農学部、県森林研究所、県対外科学技術交流協会の皆様には多大なご協力をいただきました。心からお礼申し上げます。

降水量が400mm、アルカリ性土壌、2007年は50年ぶりの大旱魃……。農業としての耕作環境がますます劣悪化していく中において、生態林造成技術が必ずや黒龍江省に寄与することと思えます。

またJICA事業と並行して実施してきました『新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹の旅』も三年目で、子どもたちと一緒に植林した樟子松

が木にもなりました。

小さなことでも続けることで日中の架け橋にならんことを願っております。

県日中友好協会は5つの地域組織に支えられ、進んでまいりました。しかし、近年の市町村合併と会員の高齢化によって縮小されてきていることも現実です。幸いにも上越において今までの地域組織とは別個の、新たに支部としての組織が立ち上がりました。本年3月には会員の研修旅行が催行され、黒龍江省外事弁公室日本処の皆様と哈爾濱の花園頓賓館において祝いの宴が行なわれました。支部の会員の皆様の発展を期待しております。

県日中友好協会の会報「県日中」の左側には「日中平和友好条約の精神を守り」とあります。1978年8月に当時の日本の外務大臣園田直と中国の外交部長黄華とによって調印されたものです。

その平和友好条約に「善隣友好の精神に基づき・・・両国間の経済及び文化関係の一層の発展並びに両国間の交流の促進のために努力する」とあります。本年は中国の胡錦濤国家主席の来日が予定されておりまた北京オリンピックの年ということもあり、会員の皆様の中国との交流往来が友好に満ちたものとしてより発展されることを願いつつ、当協会へのご支援ご協力をお願い申し上げます。

（理事長 春日 健一）

計1.5ha2400本の樟子松林に

2007年7月、“ふれあいの森”三年目の植樹事業に取り組みました。白音諾勒村小学校の正門側と南側に新たに600本の樟子松を植えました（図）。

過去2年連続して参加していただいた西澤正恒さんから、ご寄稿をいただきました。

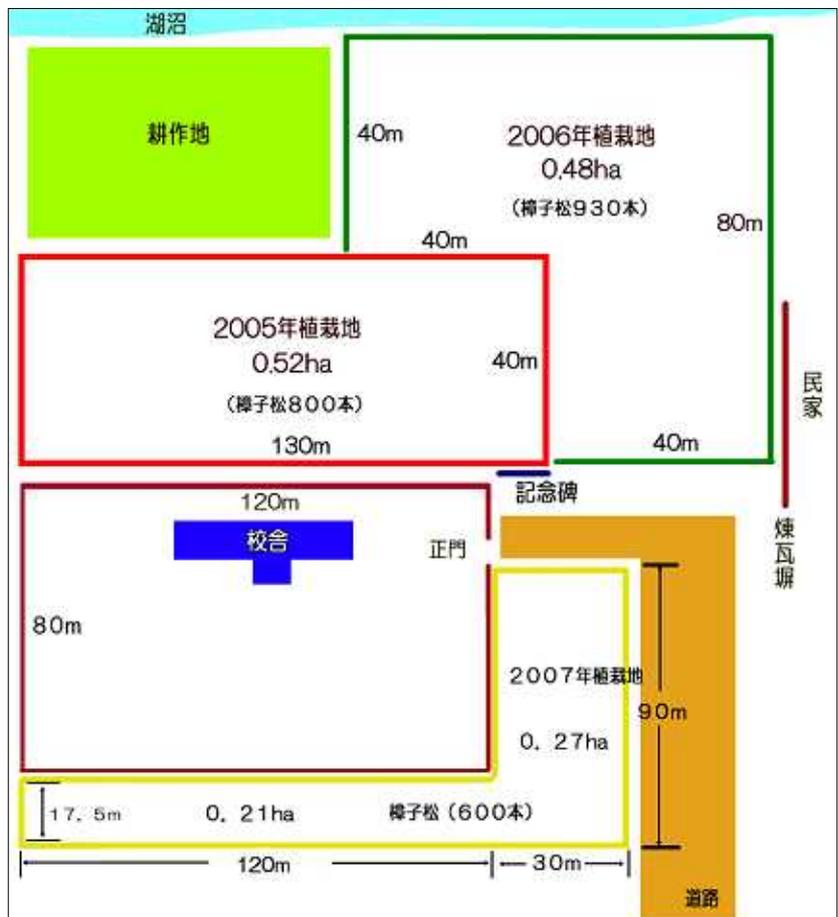
中国との出会い

私と中国との出会いは、今から20年前の1988（昭和63）年にさかのぼります。新潟市と哈爾濱市が友好都市提携10周年記念事業として造園（日本庭園）が決定された「哈爾濱・新潟友誼園」の建設に、「新潟市技術交流団」として参加したことからはじまります。

建設に当りましては、設計を新潟市が、施工を哈爾濱市が行い、双方の技師が技術交流を行いながら完成（1989年）されたものです。

技術交流団は、造園技師3名、建築技師3名の計6名の構成で、各々持ち場持ち場で設計内容、施工方法、現場指導について真剣に議論を交わしましたが、専門用語になりますとなかなか理解してもらえず、苦労したことを思い出します。特に和風建築のうち障子戸、畳、屋根葺き、また、植物材料（日本と同種類のものは数種類）は日本庭園に合うものが少なく、ほとんど代用品を使わざるをえませんでした。

その後も数回、維持管理のためのボランティア（2000年が最後）として訪れておりましたが、機会があったらもう一度という思いがありました。



そんななかで、2006年“ふれあいの森”植樹の旅が催されることを知り、参加させていただきました。

哈爾濱・新潟友誼園のその後

植樹というのが第一の目的でしたが、私には「友誼園」にも行けることも、もう一つの目的でした。哈爾濱到着後、即、長谷川義明会長さん共々友誼園に向かい、その後の状況を視察しましたが、あまりにも我々の意図が伝わっていないのには驚くばかりでした。しかし、広場の一角に植栽した障子松（植栽時直径3～5センチメートル）が直径30センチメートルほどに、また、人工湖の周囲に桜の代用品として植えた山杏も大きく成長して実をつけていました。成育期間の短い地でよくここまで成長したものだと思心したり、もう少し手入れをしたらよいのにと思案したところでした。

植栽地の土壌

翌日、車窓から移り変わる風景を楽しみながら、白音諾勒村に到着。現地に行って驚いたことには、内陸にもかかわらず海辺の植物（オカヒジキの仲間、コウボウシバの仲間など）が数種類自生していたこと、土壌が塩味を帯びていたこと、などなどでした。さらに、2005年に植栽された障子松が元気に成育しているのを見たとき、こんな環境のなかでも成育出来るんだなということを実感しました。さぞかし灌水などに苦労されたことと思いました。

そして、2007年に再び参加させていただき、校舎の側面（正門側）と前面併せて0.48ヘクタールに600本の障子松を植えました（写真上）。校舎の側面は裸地に近い環境、前面はおそらくトウモロコシ畑の跡地であろうと思われます。公有地（学校園）それとも民有地？。判断に苦しみます

2005年の植栽地は

ところが裏に回って驚いたことに、2005年の植栽地にはトウモロコシが植えてあり、そのなかに障子松が見え隠れしている（写真中）。

生活のためなのか、生育環境を考えてのことなのか定かではないが、作物との混植という面では、一年草なのでその影響はほとんど無いと思われます。むしろ、耕起による酸素の供給や施肥により松はそのおこぼれを頂戴すること、茎・葉・根などの一部の有機質が還元されること、それにより土壌中の微生物が繁殖することなどを考えると有意義なことにも思われる。トウモロコシ畑の松は、葉の色が濃いように感じました。しかし、今後も継続されたとき、松が生長していくにつれてどちらが優先されるのか、心配です。

2006年に植栽した松は、下草も生え元気に成育しておりました（写真下）。

会報36号に、“障子松純林の衰退を避けるため混植を”という記述がありましたが、既に植え付けた障子松の間に山杏等を混植するのは如何なものでしょうか。なぜなら、片や常緑針葉樹の高木、一方、山杏は落葉広葉樹の高木。どちらも陽当りを好む種であり、成長するに従って競合し、どちらかが負けるか或いは共倒れという結果になりはしないでしょうか。混植を考えるなら、む

しろエリア分けをし、各々の集団を作るほうがよりよい方法と考えます。例えば格子状に松を数列ずつ植栽し、そのなかに山杏等を集団で植える。そうすることによってお互いに競合せず、よりよい結果が生ずるのではないのでしょうか。いずれ林床には他の種が侵入し、豊かな森が形成されることと思います。私見ですが、述べさせていただきました。

最後に、地球環境が問題視されている今日、このような有意義な事業に参加させて頂き、有難うございました。

（新潟市開発公社緑化推進室長 西澤 正恒）



「生態林造成ガイドライン」を取りまとめ終了

2005年度から取り組んできた「新潟県・黒龍江省嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力事業」（JICA草の根技術協力事業）が、2007年度で終了しました。本年3月末、この事業の成果である「生態林造成ガイドライン」を関係機関に提出しました。

2007年度は、9月5日から14日までの間専門家5名を派遣し、三調査試験区（甘南県甘南林場・克山県北聯林場・杜爾伯特蒙古族自治県新店林場）において植栽木の生育状況や間伐後の植生侵入状況等を調査しました。10月11日から24日の間、宋春姫・黒龍江省林業庁科技処長ほか計6名の専門家が来県し、新潟・山形県内の自然林を視察しました。併せて、ガイドラインの内容について、詰めの協議を行いました。

以下は、三年に及んだ技術協力の評価シートの一部です。

事業評価

甘南県甘南林場並びに克山県北聯林場の間伐後追加植栽試験区・新規植栽試験区に造成した試験林は、今後継続したモニタリングが実行されれば嫩江中流域における生態林造成の有力モデルとなり得る。

一方、杜爾伯特蒙古族自治県新店林場に造成した試験林は、同様のレベルには至らなかった。新店林場との間で、環境適合樹種の選択、地拵えの方法、土壌特性（強アルカリ性）、家畜の食害・踏圧などへの対処について事前の協議が十分になされなかったことに因る。ガイドライン策定に当たり、黒龍江省森林与环境科学研究院から新店林場の調査試験区に類似した地域における植栽実績資料が提供されたこと等により、ガイドラインに反映させることができた。

黒龍江省林業庁への提言

既存の防護林を“生態的に安定し持続可能な多様性のある森林”に更新改造するためには、あるいは新規に造成するためには、制度上、「重点生

態公益林」・「一般生態公益林」の指定を受けなければならない。指定を受けることによってはじめ、公益林の撫育経費が国家・省財政 具体的には「森林生態効益補償基金」から支出される。

黒龍江省にあっては、2006年9月に至り全省的に重点生態公益林・一般生態公益林の区分が画定し、2007年以降生態公益林の撫育経費支出が担保されはじめた。

これに並行して、国有林を対象として進められてきた林木の所有権改革等も、集団所有林へと拡大されつつある。このことは、専ら一斉単純林の造成のみに偏向していた従来の林業施策が、森林の公益的機能を第一義とした施策へと転換しつつあることを意味する。

従って、“生態的に安定し持続可能な多様性のある森林”を主題とする技術的措置の確立は、時代的要請に即応したものである。

本技術協力によって造成された2調査試験区の試験林は、嫩江中流域荒漠化地区の生態環境回復保全のための実効ある技術的措置確立に向けた『先行試験』と位置づけられる。その意味で、2調査試験区のモニタリング等所要の調査が継続され、その結果が策定した「生態林造成ガイドライン」にフィードバックされるよう希望する。

JICAへの提言

本技術協力実施に先行して2003年冬季と2004年夏季に事前調査ミッションを派遣し、現地事情の概括に努めた。

技術協力実施期間は三年であったが、プロジェクトの進捗に要した期間は上記を加え延べ5年となる。

生態環境の回復保全に係る技術協力事業は、タイムスパンを長くとり、事前の情報収集・解析等を十分に行なったうえでプロジェクトサイトを絞り、実施すべきだと考える。また、類似する技術協力実績資料等のデータベース化と公開が望まれる。

（常任理事・事務局長 今野 正敏）

上越支部発足

発足を記念し

黒龍江省研修視察団を派遣



（写真：林甸県人民政府Webサイトより）

会員皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

私ども旧上越市内の有志は、今日まで新潟県日中友好協会の一員として個々に活動してまいりました。2005年の白音諾勒村友好植樹の活動にはじめて参加した仲間から、「隣国の子どもらとのふれあいや訪問を通じて知り合った中国の皆さんの温かい心、活動を通じて知った県日中の“目指す意義”を真摯に受け止めた」との感想を耳にし、訪中の成果として意を大変強くいたしました。これを機に「仲間をもっと増やして活動をさらに強化していこう」との思いを互いに確認し、後日、新潟市内において開催された会合において「上越支部」の発足を提案し、参加者全員の快諾を得、スタートいたしました。

2007年12月末までに新規会員の拡大に取り組むこととし各方面にお呼びかけした結果50名にせまる加入申し込みを得ることができました。大変心強く、またその期待に応えてゆきたいと存じます。

今後は、県日中上越支部として活動してまいりたいと思います。上越支部の会員の多くは専業農家の仲間ですので、今日までの経緯から活動のウエイトは農業関係において指向するものとなってゆくとおもいます。

発足にあたり本年3月に黒龍江省研修視察団を派遣し、大慶市林甸県斉心村と斉齊哈爾市郊外の農村視察を行うこととし、12日には黒龍江省政府の迎賓館である花園頓賓館において外事弁公室幹部の皆様をお招きして上越支部発足を披露する宴を催しました。

当面手探りの組織運営となりますが、県日中の皆様はじめ諸先輩皆様方のご支援のほど、切にお願い申し上げます。ご挨拶に代えさせていただきます。

（上越支部長 牧絵 一義）

黒龍江省研修視察団日程表

3月12日 / （新潟 哈爾濱）哈爾濱市内観光
花園頓賓館にて上越支部発足の宴 13日 /
（哈爾濱 大慶）林甸県斉心村視察（大慶 斉齊哈爾）斉齊哈爾市内観光 14日 / 斉齊哈爾市郊外の大民村・ザーロン自然保護区視察（斉齊哈爾 泰康県） 15日 / （泰康県 哈爾濱）哈爾濱市内観光 16日 / （哈爾濱 新潟）

中国 広くて奥の深国

中国旅行は経験豊富な弊社にお任せ下さい。魅力的な旅をご提案いたします。

社団法人全国旅行業協会正会員
新潟県知事登録第3-338号

株式会社
新潟ワールドトラベル

〒943-0826 新潟県上越市幸町13番13号

TEL . 025-522-8170

FAX . 025-522-8171

黒龍江省研修視察団は弊社が取り扱いました。

直面している課題

共同の努力で友好交流のあり方を模索しよう

2007年7月から新潟県国際課北東アジア交流推進室に政策企画員として勤務されている丹碩さんからご寄稿いただきました。

県省間交流促進のため新潟県が招聘したものです。

丹さんは黒龍江省外事弁公室日本処調査研究員の要職にあり、当協会の古い友人です。

私と新潟

私が初めて新潟を知ったのは、大学時代に川端康成の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という有名な一文で始まる「雪国」という小説を読んだ時であった。それ以降、新潟は一体どんな様子なのか時折想像してみた。

因みに1979年に哈爾濱市と新潟市とは友好提携し、1983年に黒龍江省が新潟県と友好提携してから、黒龍江省と新潟県との各分野における交流と協力は益々広がり、黒龍江省では新潟の知名度が高まってきている。

1988年に外事弁公室に勤務し始め、黒龍江省と新潟県との友好提携5周年記念行事参加のため、新潟県からの代表団受入のお手伝いをして以降、私と新潟の方々との付き合いが本格的に始まった。

私自身は、1991年に県費留学生として新潟大学に一年間留学し、仕事の関係で年一回以上新潟を訪問することができた。

今は、新潟のコシヒカリ、信濃川の夜景を満喫しながら、楽しい日々を送っている。

新潟県日中友好協会は

1979年、新潟県日中友好協会が設立され、黒龍江省農業基本建設技術協力団が三江平原を調査し、宝清県龍頭橋地区をモデル地域としダムを建設することを確定したことから、新潟県と黒龍江省との本格的な交流が始まった。

この30年近くの間、両地域は、経済・貿易・

教育・科学技術・環境保全・スポーツなど幅広い分野における交流を行い、両地域の相互理解と友好関係を深めてきた。

新潟県日中友好協会は民間友好団体として、黒龍江省と新潟県との各分野における友好交流や協力を促進するために多大な貢献をなされ、両地域の友好関係を確実に進められてきた。

佐野藤三郎先生をはじめ県日中の皆様は、円借款による龍頭橋ダムの建設に向け関係の友人と一緒に何度も現地を視察され、第四次円借款でダムの建設が始まった。

新世紀に入ってから、中国の「希望工程」に着目し、杜爾伯特蒙古族自治県の小学校に教具などを寄付された。杜爾伯特蒙古族自治州地域は砂漠化しており、県日中は植樹活動を行って同県の環境保全に大きな協力をされた。

黒龍江省と新潟との各分野における交流のため、県日中の皆様は心血をかけて努力された。

多くの県日中の皆様が年配でありながら熱心に日中友好事業に携わっていただいていることに、非常に感心している。

新潟への期待

経済のグローバル化と地域経済一体化の流れにあり、地方自治体間の交流と協力関係はますます重要なものとなっている。

新潟県などが主催して開催される「北東アジア経済発展国際会議」は、北東アジア各地域・地方自治体間のビジネス情報交換、経済交流の場となっていると思う。新潟は日本海側の表玄関として世界に注目されていると思う。

また、1996年に発足した北東アジア地域自治体連合は最初の4カ国29の地方自治体から、現在の6カ国65の地方自治体（中国東北地域、韓国、朝鮮人民民主共和国、モンゴル、ロシア極東地域）に発展してきた。この連合には、環境、防災、経済通商、国境地域における経済協力、科学技術などの分科会が設置され、ビジネス情報交換や人的交流などを行い、重要な役割を果たし

ていると思う。新潟は黒龍江省と北東アジア地域自治体連合のメンバーとして欠くことのできない都市ではないかと思う。

黒龍江省の国際交流

黒龍江省は、1983年に新潟県、1986年に北海道、1993年に山形県とそれぞれ友好関係を結んでいる。この他、哈爾濱市と北海道旭川市、齊齊哈爾市と栃木県宇都宮市、牡丹江市と山梨県韮崎市、佳木斯市と滋賀県大津市がそれぞれ友好提携をしている。

寒冷地域である黒龍江省はまた、カナダのアルバータ州、アメリカのウィスコンシン州、ロシアのハバロフスク地方、アムール州、ベルギーのルクセンブル州などの地方自治体のほか、韓国、ハンガリー、イスラエル、オーストラリア、チリ、ブラジル、南アフリカなど25カ国との間で58組の友好関係を提携している。

哈爾濱とユダヤ民族の間には繋がり深い歴史があり、戦前に2万人余りのユダヤ人が哈爾濱で暮らしていた。ここ数年、哈爾濱とイスラエルの間では農業・科学技術・経済・文化などの分野における交流合作が行われている。

黒龍江省は

建国前、省都哈爾濱市には、16カ国の領事館が設置され、国際貿易、経済交流が盛んな国際商業都市であった。青島ビールは世界でよく知られているが、実際には哈爾濱ビール工場が中国最初のビール工場であり、青島ビールより2年古い歴史を持っている。

建国後、中国の第一次五カ年計画（1953年～1957年）により、156件の重点プロジェクト（大型国営企業の建設）の内58件が黒龍江省に建設された。以降黒龍江省は国民経済の発展に大きな貢献をし、中国の重工業都市として重要な役割を果たしてきた。

黒龍江省には蒸気タービン、ボイラー、発電機、鉄道貨物車輛、航空機、大型工作機など数多くの大型企業が立地している。ここ数年、経済建設が進む中で、哈爾濱市政府は企業所有の学校、病院等の附属機関を有する社会機能が整った大型企業に対し、その分離改革を行っている。

また、“哈大齊（哈爾濱 大慶 齊齊哈爾）

工業回廊”の建設を推し進めている。

黒龍江省の“出海”ルート

1992年、黒龍江省の商船がロシアのアムール川を経て間宮海峡を通り、外洋に入った。

130年余りの黒龍江省の水陸輸送は、国内だけでの輸送の歴史を終えた。

「東方水上シルクロード」と称されているこの輸送航路は、黒龍江水系各港とロシアのブラゴヴェシチェンスク、ハバロフスクなどの港を通して、アムール川最下流の港であるニコラエフスク（Nikolayevsk-na-Amure）から間宮海峡を経て日本海に入るもので、日本、韓国など北東アジア諸国及び中国南東沿海地域に貨物を直接輸送できるようになった。黒龍江省の石炭、食糧、非金属鉱石などはこの航路により直接日本の北部港まで輸出でき、生産地から目的地港までの直行輸送ができるようになった。

日中友好のあり方を模索しよう

今年の日中平和友好条約締結30周年、黒龍江省と新潟県との友好提携25周年を迎える。様々な記念行事が行なわれる予定であるが、新世紀を迎え、経済のグローバル化と地域一体化の流れの今日にあり、日中友好をどう進めるかが我々の今直面している課題ではないかと思う。

共同の努力で新たな交流のあり方を模索しなければならないと思う。

（黒龍江省外事弁公室日本処調査研究員 丹 碩）



詳しくは
ホームページをご覧ください。

<http://www.yuttari.jp>

コスモトラベル 025-244-0977

新潟市中央区沼垂西1丁目4-2

“ふれあいの森”植樹の旅は弊社が取り扱いました。

日中交流会議に参加して

日中友好のこれからを考える



2007年5月23～24日、第11回日中交流会議が中国・四川省成都市で行われた。日本からは野中広務（社団法人日中友好協会名誉顧問）団長以下約70名、中国側は宋健（中日友好協会会長）顧問、井頓泉（同副会長）団長以下110名、計180名が参加した。会議のテーマは“戦略的互惠関係と民間交流の役割”である。

会議の初日は、両国代表の挨拶に続いて、井頓泉団長、井出正一（社団法人日中友好協会副会長）副団長の基調報告があり、午後から三つの分散会による討議が行われた。

二日目は、各分散会の座長から討議内容が報告され、日中双方から総括発言を行って、二日間にわたる会議は終了した。

分散会で討議された問題は、多方面の交流・文化、経済、科学技術、特に青少年交流、環境、緑化事業等々である。私の所属は第三分散会で、出席者は50名を超えていた。発言者の多くは、自らの属する組織の活動報告に終始し、問題を取り上げ、本音をぶつけあう議論は殆んど行われなかった。時間的制約もあったにせよ、甚だ欲求不満の残る分散会であった。第一、第二分散会もほぼ同じような状況であったようである。

会議全体としては、友好ムードのなか日程表通りスムーズに行われたと言えようが、これだけ多くの人が両国の各地から集まってきたのだから、これでよかったかどうか考えさせられた会議であった。

2005年の長野市での交流会議は、中国各地で反日運動が頻発した時期に当たり、特別な緊張感のなかで討議が行われた。国交正常化以来、両国民の間の感情が最も悪化した時期であることを認識した上で、そういう時期だからこそ友好交流のために努力すべきである、という声に満ちた会議であった。

意固地とも思える小泉元首相の靖国神社参拝によって両国の首脳間に深い亀裂が生じて5年間、安倍前首相の訪中で“戦略的互惠関係の構築”という共同発表、“氷を溶かす旅”と発言した温家宝首相の訪日という政治的な強い背景のある今回の会議ではあるが、“靖国問題”、“歴史認識”、“教科書問題”等々はどこへ消えてしまったのか。

もちろん未来指向が大切なことは間違いないが、もう一度足もとをしっかりと見直す必要もあるのではなからうか。

この会議に黒龍江省からは外事弁公室の王英春副主任、丹碩日本処副処長が参加して、旧交を温めた。中日友好協会の劉子敬理事と董振華友好交流部副部長とも久し振りに邂逅し、会議日程終了後の観光ツアーでは、幸いにも四氏と一緒に楽しく過ごすことができた。また、宋健会長にご挨拶する機会に恵まれ、宋会長も新潟を懐かしがっておられた。

観光ツアーは、海拔3000メートルを超える高地にある世界遺産“九寨溝”（この世の仙境といわれる）と“黄竜”（この世の瑶池といわれる）で、総勢32名の感激の旅であった。四川省は、古くは三国志で有名な蜀の国であり、現代はパンダの古里として有名である。省都の成都市内には諸葛孔明や劉備玄德などを祀る“武侯祠”や“パンダ保護飼育基地”がある。また省内には世界文化遺産にも名を連ねる“峨眉山”、“樂山大佛”、“青城山”等々、歴史、文化、自然豊かな名勝地が数多くある。中国流にゆったりと旅したい地である。

（常任理事 巾 昭）

いわふね国際交流協会

中華料理講習会開く

11月も中旬の日曜日、小雨模様のあいにくの天候でしたが、会場となった村上市岩船下町・真言宗「最明寺」の広い寺院内は意外と暖かかった。

案内書を出した方は80余名でしたが参加者は16名、せめて20名くらいは集めたかったのですが、誘い方に工夫が足りなかったのかと思いました。

料理の方は10時過ぎから荒川町坂町の齋藤さん、神林村松澤の田中さんを中心に、女性の参加者も手伝いをして、油で揚げたり茹でたりで、次々と美味しい料理の出来ばえとなりました。

やはり、齋藤さん、田中さんが、前日或いは早朝から仕込みされたお陰でした。特に水餃子作りには男性陣も加わり、ほとんどはじめての方々ばかりなのに驚くほどの出来上がり。茹であげる際にも破損せずに済んだことは、感激の至り。これも、齋藤さん、田中さんが付きっきりで指導されたお陰でした（写真）。

よく、「天に星、花に水、料理に心」と云われますが、まさに心のこもった指導であり、味のある料理になったと思います。

いよいよ食事会。サンゲタン、キムチについては材料と効用を伺いながら、また漬物など自分たちが作ったものを持ち寄り、これに舌鼓を打ちながら、日本語に慣れるまでのこと、生れ故郷のこと、これからのこと等を話題に交流し、食事は進みました。

1時間半ほどの食事会。普段はそれほど多く食べないのに、料理している最中から試食と称して本当によく食べました。

料理した量が多かったのか、「モッタイナイ」の言葉にもありますように、それぞれ家族への自慢話とお土産に持ち帰りました。

会場を提供して下さった最明寺さん、料理の材料と仕込み、そして指導して下さった齋藤さん、田中さん、菅井さん、本当に有難うございました。

（いわふね国際交流協会事務局長 高橋 賢一）



栃尾日中友好協会

会員交流会開催

10月20日（土）割烹東雲において出席者25名にて栃尾日中友好協会会員相互の親睦を図るため、会員交流会が開催されました。

当日は会場に、栃尾日中友好協会が過去に日中友好の国際交流活動をした写真パネル（黒龍江省等の訪中交流時の写真）が展示され、出席会員は改めて栃尾日中友好協会の活動を再確認されたようです。

会員交流会は、佐野二三会長が挨拶と併せて栃尾日中友好協会の基本方針並びに平成19年度、20年度の日中交流事業等について説明された後、出席会員より今後の活動につて貴重な意見要望が出され、次年度の事業計画に反映させることで合意されました。

（栃尾日中友好協会 北村 公）

新発田市日中友好協会

総会に丹碩さん出席

新発田市日中友好協会平成19年度総会が、2007年10月26日に開かれました。お招きをいただき、黒龍江省外事弁公室の丹碩さん（県国際課に在籍中）と奥様が出席されました。

総会終了後の懇親会には、同市内のアパレル関連企業で研修している中国の女性が大勢参加し、石井修会長はじめ岩村良一・佐藤浩雄両県議や会員の皆様と和やかに歓談されました。県日中からは春日健一理事長と今野が出席しました。

（常任理事・事務局長 今野 正敏）

閑話休題

友好交流の原点

民間人の立場で日中友好を希う私たちの多くは、過去に日本が犯した事に対する贖罪の気持ちと、長い交流の歴史がある隣国中国の発展に寄与したいと思う心で、さまざまな活動をしてきた。その志こそが友好交流の原点である。

日中国交正常化と平和友好条約締結以来、官も民も夫々にそれなりの成果を挙げてきた。改革開放政策を打ち出してからの中国の発展、特に経済的発展は目を見はるものがある。日本との経済的な関係も、年毎に大きくなっていった。小泉時代に“政冷経熱”という言葉が盛んに使われたことは記憶に新しい。と同時に、両国間に横たわる根本的な問題がクローズアップしたことも事実である。小泉、安倍、福田と時代が移り、政府間の溝は急速に改善しつつあるが、日中両国民の相互の不信感依然としてあまり変わっていないように思う。

今回の日中交流会議のテーマ - “戦略的互惠関係と民間の役割”とは、まさにこの問題の解消でなければならない。両国民の大多数が、互いに尊敬の念と好意を抱いて交流を重ねることが、唯一最大の目標であると信ずる。

思い過ごしであるのなら

現在の中国は、大都市を中心にかつての日本の高度成長期とバブル期を併せたような状況にある。しかし一方で、大きな格差を生んでいる。身近な話として、さま変わりした哈爾濱市から小学校の援助や植樹したバイナル村へ向かうバスの車窓から見える風景からも、そのことがうかがえる。哈爾濱市近郊の豊かな農村のたたずまいも、走る距離に比例して貧しさが感じられる。

貧しい地区の小学校の援助と将来の豊かな緑地を想い画いて励んだ私たちの活動は、参加者の善意で行われたものである。この活動は全体から見れば些細なものかもしれないが、両国民の小さな架け橋になってくれればと願ってのことである。しかし、私たちの好意があの子もたちやその家族に本当の意味で伝わっているだろうか。善意の押し売りなど毛頭する気はないが、村の人た

ちが心から喜んでくれなければ意味がない。上部の人たちを喜ばせる結果になるだけなら空しい。私の単なる思い過ごしであるのなら幸いである。

2008年は“北京オリンピック”の年である。日本チームへの観客の反応も気になるところだが、東京オリンピックがそうであったように、これを期に中国が一層発展を遂げていくことを念じている。

編集者：常任理事 巾 昭

吉川日中友好協会

〒949-3445
上越市吉川区原之町2010-8
吉川土地改良区内
025(548)2808

新発田市日中友好協会

〒957-0053
新発田市中央町4丁目11-22
石井修事務所内
0254(24)4411

栃尾日中友好協会

〒940-0216
長岡市栃尾新町1-3
佐野ニット内
0258(52)3202

中之口日中友好協会

〒950-1348
新潟市西蒲区打越丙1503
平岡様方
025(375)3272

いわふね国際交流協会

〒959-3424
村上市牧目576
穂菜味亭内
0254(66)7809



発行人：理事長 春日 健一

編集者：常任理事 巾 昭

印刷所：(有)アサヒ印刷クリエイティブ